河内路上

菊池 渓琴

南朝の古木寒霏に鎖さる
六百の春秋一夢非なり
幾度か天に問えども天答えず
金剛山下暮雲帰る

【作者】菊池　渓琴（きくち　けいきん）（一七九九～一八八一年）名は保定（やすさだ）。字は士固（しこ）、孫助（まごすけ）と称し、渓琴はその号。後その号を海荘（かいそう）と改める。紀州（和歌山県）有田郡（ありたぐん）栖原村（すはらむら）の人。大窪詩仏（おおくぼしぶつ）に学び、詩を好くし、佐藤一斎（さとういっさい）、頼　山陽（らいさんよう）、広瀬旭荘（ひろせきょくそう）、安積艮斉（あさかごんさい）、梁川星巌（やながわせいがん）、藤田東湖（ふじたとうこ）、佐久間象山（さくましょうざん）など一流の士と親交があった。名節を尊び、武芸を好み海防の急務を建言した。明治14年東京で没す。年八十三。著書に「秀餐楼集」「渓琴山房集」「海荘集」等がある

【語釈】＊河内路上…河内（大阪）の金剛山の麓に楠正成の遺跡を訪ね、往時を追懐したので、このように題した

＊寒霏…つめたいもや　＊六百春秋…六百年の歳月・「春秋」は歳月の意　＊一夢非…一場の夢と化して、すべてが昔と変わってしまったの意。

【通釈】遠く南朝の頃からの古木はつめたいもやにとざされ、六百年の歳月を隔てて、楠公の事跡も一場の夢と化して、今はすべてが昔と全く変わってしまった。そこで何回となく天に向って昔の事をたずねてみたが、天は一向に答えてくれない。ただ金剛山の麓に、昔と同じように、夕暮れの雲が　帰っていくのが見えるばかりである。